国際漁業学会（JIFRS）短信

https://www.jifrs.info/

事務局　E-mail: jifrs.kaiyodai@gmail.com

郵便振替番号：00100-6-26448　国際漁業学会

振込：ゆうちょ銀行　店番 019　当座　店名〇一九店　口座番号 0026448

2023 年度第 2 号

2024 年 1 月 18 日刊

目次

１．理事あいさつ「研究と学びの場」　神山龍太郎

２．2023 年度 JIFRS 大会（静岡大会）参加報告(1)　徐威

３．2023 年度 JIFRS 大会（静岡大会）参加報告(2)　立花佐和子

４．2024 年度 JIFRS 大会（横浜大会）予告　神山龍太郎・松井隆宏

５．事務局便り　事務局

１．理事あいさつ「研究と学びの場」

神山龍太郎（国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所）

2022 年より国際漁業学会の理事を拝命いたしました国立研究開発法人水産研究･教育機構水産資源研究所の神山龍太郎と申します。以前から編集委員会幹事を担当しております。どうぞよろしくお願いいたします。

私の国際漁業学会との出会いは大学院修士時代（2009 年頃）に遡ります。当時の国際漁業学会私の国際漁業学会との出会いは大学院修士時代（2009 年頃）に遡ります。当時の国際漁業学会は前身である国際漁業研究会から学会に転換して間もない時期で、これから学会を盛り上げていこうという雰囲気に満ちていました。私の指導教員であった黒倉寿先生（本学会顧問）も、水産学の社会科学分野を一層発展させる必要があるというお考えからその取り組みに関わっており、また、私自身の学位論文研究が海外（フィリピンの漁村）をフィールドとしていたこともあって、国際漁業学会で研究発表をさせていただきました。それ以来、国際漁業学会は私の主要な活動の場です。

これまでの国際漁業学会での活動を思い返してみますと、素晴らしい先生方や先輩研究者の皆様と出会い議論する機会をいただいたという思いがまず心に浮かびます。研究発表後の質疑応答や大会の懇親会で、研究や学問について、また、国内外の水産業などについて議論させていただき（あるいは議論を隣で聞かせていただき）ました。国際漁業学会のスコープは幅広い学問・実務の分野に及んでおり、それら分野の専門家が学会の活動に参加しているため、特に大学院生時代の私にとって重要な学びの場となりました。

また、編集幹事のような学会の役職を務めるのも本学会で初めて経験することであり、学会運営や論文審査の裏方を経験する大変貴重な機会をいただきました。編集委員会では論文の審査を

巡ってしばしば議論が生じます。私もよりよい学会誌運営ができるよう真剣に考え、自分の意見を申し上げるよう心掛けています。私のような若輩の意見でも他の編集委員の皆様はしっかり受け止めてくださり、私の認識に誤りがあるときには率直に正してくださいます。このオープンかつフラットな雰囲気は国際漁業学会の特徴のひとつではないかと思います。

国際漁業学会での活動を通して多くの学びをいただき、心より感謝しております。今後、学会運営を通してご恩返しをしていきたいと思います。また、その中で考えていかなければならない学会の課題もあると感じています。中でも若手世代の減少は重要な問題です。最近私よりも若い世代のアクティブな学会員が少ないことを懸念しております。博士課程学生やポスドクの減少が直接的な原因であり学会運営だけで解決できる問題ではありませんが、学会の存続に関わります。私自身も、現在学会に参加してくださっている後輩世代をしっかりとサポートし、また、他分野の若手に声がけをしながら、魅力ある学会づくりを目指してまいりたいと思います。

２．2023 年度 JIFRS 大会（静岡大会）参加報告(1)

徐威（東海大学大学院）

2023 年 8 月 26 日・27 日に渡り、東海大学静岡キャンパスにて国際漁業学会（JIFRS）2023 年度大会が開催されました。大学院に進学することをきっかけに JIFRS に入会させて頂いた私にとっては、今回が大会初参加となりました。会場運営補助と個別発表もあり、両日全ての発表を聴講することができました。本稿では、シンポジウムと個別報告について述べさせていただきたいと思います。

まず、シンポジウムについてです。今年度の共通のテーマは「漁村地域の活性化と海業の推進」となっており、海業政策導入と漁港制度改革の動きを踏まえつつ、漁村地域経済活性化について焦点を当てて、海業振興の意義と漁港制度の改革や海業のあり方をめぐっての報告となりました。

第１部では、研究者４名による研究報告になります。第１報告は、浪川珠乃氏（一般財団法人漁港漁場漁村総合研究所）による、「海業の振興をめぐる政策的展開」についてでした。漁村地域の交流重視からビジネス重視の施策が展開され、その中で海業を取り入れ、地域資源の活用や漁港施設の有効活用を民間との連携で、盛り上げていく重要さを感じ取ることができました。

第２報告の李銀姫氏（東海大学）は、「海業の振興とブルージャスティスの重要性」というテーマで、海業振興の重要性や意義、及び小規模漁業における公平・公正性問題、Equality と Equity の違い等についての説明が行われました。今後海業を進めていくうえで、このブルージャスティスの視点が必要であることを認識できました。

第３報告の神山龍太郎・飛田努・松井隆宏氏ら（水産研究・教育機構、福岡大学、東京海洋大学）のテーマは「海業の振興とビジネスモデルの構築」に関してであり、ゲイト社の事例に、コロナ禍での海業のビジネスモデルのあり方・変化についての分析が行われました。人材確保や事業機会の創出のため、その時代と合ったビジネス形態に合わせて展開していくことが、今後の海業の推進では、重要であることが感じ取ることができました。

第４報告は、シドニー工科大学の Kate Barclay 氏による「オーストラリアの漁村経済と海業」でした。日本と同じく、オーストラリアでも小規模漁業が多く、個人経営が多いことや魚の鮮度を大切にしていることが分かりました。また、マリンレジャーと漁業の摩擦も多く生じていることも伺えました。しかし、オーストラリアでは、日本のように、漁業者が遊漁を営む等のケース

がなく、今後、海業の導入や推進は、このような問題の解決に向けた重要な糸口であることを考えさせられました。

第２部は、静岡県の漁業関係者による事例紹介です。由比地区をはじめ、伊東地区、稲取地区、用宗地区における海業の取り組みが取り上げられました。それら４地区の共通点として、漁業と一般の方々が交流できるような場が存在することが挙げられます。例えば、第１に、稲取地区の鈴木精氏の報告によると、稲取漁港直売所「こらっしぇ」は、漁業者と一般の観光客の交流の場でもあり、さらに、農産物の販売も行われており、漁業と農業と消費者間の三位一体の関係が作り上げられた海業の１つの事例となっています。第２に、用宗地区の斉藤政和氏の報告では、清水漁業協同組合用宗支所の青壮年部が、環境変化などによる影響によりシラス漁が安定しない中、ワカメの養殖と未利用資源だったアカモクの販売で収益の向上に成功したことが紹介されました。さらに、同青壮年部は「第 28 回全国青年・女性漁業交流大会」での活動発表で、最高賞の農林水産大臣省を受賞したことを紹介しました。こうした活動により、新たな地域資源の創出、そして地域活性化にもつながっていることが理解できました。

翌日は、２つの会場に分かれて、計 21 タイトルの個別報告が行われました。一人 17 分の発表時間が与えられ、８分の質疑というプログラムになります。国内外の事例を対象としており、英語と日本語による発表となりました。とてもグローバルな雰囲気を感じました。発表の内容は、主に漁村振興、持続可能な漁業に加えて、水産資源管理についてです。私自身も午前中に個別発表させていただき、非常に貴重なコメントをたくさんいただくことができました。初めての学会発表であったため、とても緊張しましたが、無事に終えることができました。質疑にうまく対応できなかったこと等、反省点はたくさんありますが、この経験を今後の研究活動に活かしたいと思っています。

以上、2023 年度大会について簡単に述べさせていただきました。最後、この場を借りまして、学会発表や運営補助等、貴重な経験をさせていただいた指導教員の李銀姫先生をはじめ、妻小波会長、宮田勉副会長をはじめとする学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。そして、二日間にわたって、貴重な助言と励ましをしてくださった先生方に心より感謝いたします。ありがとうございました。

３．2023 年度 JIFRS 大会（静岡大会）参加報告(2)

立花佐和子（近畿大学産業理工学研究科博士前期課程）

私は本学会の大会に今回初めて参加した。普段は里海の研究に励む自分にとって、本大会のテーマであった「漁村地域活性化と海業の推進」は関心の高いトピックであった。研究者や漁業関係者、そして新しいビジネス形態としての実践を行う事業者など、多様な立場の参加者によって多面的に海業について議論が展開された。さらに、国際学会ということもあり、オーストラリアや欧州の事例紹介もあり、漁業に対する一般的な意見が国によって異なることも学んだ。全体的に、小規模漁業を営む地域において、漁業者と非漁業者や地域外の人々との連携が必要であると強く感じた。

大会１日目のシンポジウムでは、８名の報告者による発表が行われたが、特に印象深かったトピックが、海業の社会的意義と、漁協の活動に対する非漁業者のサポートである。まず、海業の社会的意義について考えていく必要があると、東海大学の李先生は述べていた。「ブルージャステ

ィス」という概念を紹介した上で、政策に関して理想的な絵や魅惑的な言葉などではなく、現実的な実態の詳細について説明するべきであること。さらに、海業の深い理念が正しく理解されることなく、単なる海のビジネスとして捉えられてしまう懸念は、自分も大いに感じた。海業に関する理解度に関しては、由比港漁協の宮原氏の報告でも挙げられていた。漁師が海業をどこまで理解しているのか確認するべきで、海業として漁協は何をすべきなのかを考える必要があると述べた。よって、政策の場と現場の両方で、各地域に見合った海業の具体的な姿とその理念について理解できるように話し合いの場が必須であると思った。

次に、漁村地域が海業を行う上で、非漁業者との継続的な連携が環境変化による経営圧迫や老朽化した漁協施設、そして漁業者の減少に対応するために必要であるという意見が複数の漁業者によって報告されていた。報告の中で多数の課題が提示されたが、具体的解決策を考えていく上では、漁業者など海に関わる人々、行政、専門家を含めた話し合いを設定することが必要であると感じた。そんな中で、地域外の非漁業者との連携の成功事例として株式会社ゲイトによる、未利用魚を活用した新たなビジネスモデルについて報告された。会場では東京の飲食業者が漁村に入り込めたことに感心の声もあがっており、その珍しさと新規性がより強調されたように感じた。具体的にどのように利益が地域に還元されており、地元コミュニティとの関わり方についても話を詳しく聞いてみたい。

地域との繋がりに関して特に自分の中で興味深かった課題は、由比港漁協による小学生を対象とした体験学習に参加する学校が、地元である静岡市からは１校と、非常に少なかったことだ。理由として、地元でこのような取り組みが行われていることを知らない小学校も多いのではないかと考える。魚や魚の食べ方について知ってもらうだけでなく、海で起きていることを知ってもらうことで、海に親しみを持ってもらう。子ども達が興味を持つと、影響される両親や家族がいる。関心を持つ人口を増やすためにも海に関わる切り口の一つとしてこのような漁協の取り組みを社会がサポートするべきなのではないかと思った。

シンポジウムの後は懇親会が開催され、普段関わることのない他大学の先生や学生と交流することができた。それは、大きい研究室に所属していないからこそ自分にとって想像以上に価値のある経験になった。特に海洋大学の学生との交流の中で、漁業におけるジェンダー問題や、海洋生物に関する研究など、同じ学会に参加している学生でも異なる分野で興味を持っており、それが海業を軸に繋がっていることが分かった。さらに、海洋大学の学生は地元の漁師とも交流があり、船に乗ることもあると聞き、羨ましく思う気持ちもあった。

2 日目は、海業の事例や課題について多様な観点から個別報告が行われた。特に川辺先生の洋上風力発電と漁業協調に関する報告は、複数の海業による多目的な海面利用を行う中で避けては通れない合意形成のプロセスについて明らかにした。挙げられていた千葉県銚子沖の事例では、洋上風力の促進区域内外を新たな漁場にすることなどで、協調が促進されている。2028 年より運転開始予定であるが、これからどのように関係者同士の連携が展開されるのか楽しみである。また、里海と海業に関する報告が近畿大学の日髙先生によって行われたが、私自身、海業に対して本大会をきっかけに理解を深め、里海にその要素をどう活かしていけるかについて考えていきたい。海業と里海に共通しているのは、社会の多様な立場の人間が海をきっかけに繋がることである。この繋がりによって本大会で挙げられた様々な課題にどう対応していくのか、これからの漁村地域の姿、そして海業の発展に自分も貢献できれば幸いだと感じた。

４．2024 年度 JIFRS 大会（横浜大会）予告

神山龍太郎大会開催機関代表・松井隆宏大会運営委員長

2024 年度大会は水産研究・教育機構にて行う予定です。多くの会員、関係者の皆様からのご参加をお待ちしております。

会 場：国立研究開発法人水産研究・教育機構（予定）
〒236-8648 神奈川県横浜市金沢区福浦 2-12-4
日 時：2024 年（令和 6 年）8 月 24 日（土）～25 日（日）
日 程：8 月 24 日　午前：各種委員会・理事会
午後：シンポジウム（漁業・養殖業の成長産業化と経営イノベーションに関するテーマを予定）
夜：懇親会
8 月 25 日　午前：個別報告（申し込み数が多ければ午後も）
午後：総会等
参加費：一般会員 2,000 円
一般非会員 3,000 円
ただし、漁業関係者や学生は無料

５．事務局便り

１．2023 年度 国際賞、国内賞について

2023 年度は、国際賞（JIFRS YAMAMOTO AWARD）・国内賞共に該当がありませんでした。次年度以降、推薦をお寄せくださいますようお願いいたします。

2. 今後の大会シンポジウムテーマ等について

今後の大会シンポジウムテーマや個別報告の「特別セッション」などにつきまして、企画提案を募っておりますので、ご提案や企画などがございましたら、事務局までご一報いただけますと幸いです。

3. 会費や大会参加費の納入について

2020 年より会費等の納入先が変更になっています。本短信の冒頭に記した情報をご確認のうえ納入をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

2024 年も国際漁業学会における活発な活動をよろしくお願いいたします。